異文化交流の歴史生かせ

長崎でシンポ 地域活性化策探る

パネル討論で発言する稲富氏（左）とバークガフニ氏（中央）、陳氏
＝長崎市、長崎歴史文化博物館

特異な歴史を踏まえて本県の未来を考えるシンポジウム「ナガサキと異文化交流」が8日、長崎市立山1丁目の長崎歴史文化博物館で開かれ、海外にルーツを持つ地元の研究者らが、海外交流史を生かした地域活性化策などについて意見を交わした。

県内の有志で歴史に関する話題を中心に議論している「新長崎学研究会」（大村市、稲富裕和代表）の主催。今回は月1度の勉強会を公開シンポジウムとして開いた。歴史ファンら約40人が参加。

パネリストとして▽稲富代表（県考古学会長）▽カナダ出身で長崎総合科学大のブライアン・バークガフニ特任教授（歴史社会学）▽長崎生まれの華僑4世で長崎中国交流史協会の陳東華会長―が登壇。それぞれに講演し、稲富氏は「長崎は海外との交流で栄えたが、今はこれを過去形で語らなければならないことが問題」と論点を提起した。

講演後、3人によるパネル討論を実施。グラバー園名誉園長も務めるバークガフニ氏は、明治期の外国人居留地を起源とする洋館群に言及。「長崎独特の和洋折衷の建築スタイルの洋館が残っていて、これまで何もしなくても観光客が訪れていたが、考え直す時期。建物だけでなく、最新の優れた展示や当時の外国人の暮らしぶりが分かる展示など情報提供（の在り方）を研究すべきだ」と指摘。

陳氏は、世界中でイメージが定着している「中華街（チャイナタウン）」のブランド力活用を提言。「新地中華街に磨きをかけて『チャイナタウン』のイメージに合うようにしていきたい」と語った。（山口恭祐）